

“さめる”といふ言葉

“さめる”といふ言葉は、「湯が冷める」「酔ひが醒める」「眠りから覚める」「色が褪める」など、これもいろいろに使はれる言葉である。この言葉の本義は、「ある特別な状態から、元のあるべき状態に戻って行く」といふ意味の言葉だと思ふ。

例へば、湯は水を沸かしたもので、水の特別の状態である。だから、放って置けば元の水に戻る。湯といふ特別の状態から元の水に戻って行くのが「湯が“さめる”と言ふことであらう。

また、酒を飲めば、酔って頭が朦朧<sup>きょうろう</sup>となり、快い気分になるが、放って置けばまた元の状態に戻って行く。それで、これも「酔ひが“さめる”と言ふのであらう。「眠りから“さめる”といふのも、同じことである。起きてゐるのが本来の状態であって、眠りといふ特別な状態から本来の状態に戻って行くから“さめる”と言ふのであらう。

また、色も、白いものに色づけするのが普通であるから、色づけされたものが、時の経過と共に、元の白い状態に戻って行くので、これも「色が“さめる”と言ふのだと思ふ。

このやうに考へてみると、国語の“さめる”といふ言葉は、実に抽象化された言葉であって、だから、使ひ方が実に広いのである。その代り、

よくよくその意味を追求し、考へてみないと、言葉の本当の意味は解らない。

ところが、この言葉を“冷める”“醒める”“覚める”“腿める”といふやうに漢字で書き表すと、途端に、“さめる”といふ言葉が生き生きとしたものになって迫って来る感じがする。それほど、“さめる”ではもやもやしてゐたものがはっきりするのである。

だから、私は、国語を出来るだけ漢字を使って表記するやうに努めることが大切だと思ふ。漢字を選ぶといふことは、頭の良い訓練になることと思ふ。頭は使はなければ決して良くはならないのだから、漢字を使ひ分けることは大変だと言つて避けてはならないのである。

ただここで注意しなければいけないと思ふ事は、漢字で表記すると、漢字の具体性のために抽象的な日本語の本義が忘れられ、更には歪められてしまふ恐れがある、といふことである。

例へば「湯が冷める」といふ表記のために“さめる”といふ言葉を“冷える”“冷たい”といふ言葉と同じ意味の言葉と思ひ込んでしまひ易い、といふことである。

この頃よく“冷めた”目」といふ使ひ方を耳にもし目にもするけれども、これは“冷める”といふ表記から生じた誤解に因るものだと思ふ。

日本語の“さめる”が、「本来あるべき状態に戻って行く」といふ意味

日本語の再発見

の言葉であるから、「“さめた”目」といふのは望ましいことでなければならぬが、使っている所から見てさうではないから、これは誤用であると言はざるを得ない。

そもそも“さめた目”と言へば、“覚めた目”もしくは“悟めた目”と受取るのが自然である。恐らく、“冷たい目”では表現が平凡過ぎるといふことで、斬新な表現のつもりで“冷めた目”と言ったものであろうが、漢字の表記によって、日本語の本義が歪められる恐れがあることは間違ひないので、注意することが大切だと思ふ。